

うきたむ

第56号

2020.12.1

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

山形県東置賜郡高島町大字安久津 2117 TEL 0238 - 52 - 2585

FAX 0238 - 52 - 4665

URL <http://ukitamu.pupu.jp/>



▲二井宿峠から望む「屋代荘」

デイスカバー「ヤシロ」

うきたむ考古資料館運営協議会会長

岩崎 義信

康暦二年（一三八〇）、伊達宗遠は奥羽山脈を越え置賜盆地に侵入する。屋代荘を拠点に置賜盆地一帯を侵略するも、安久津八幡宮を手厚く保護したと伝わる。幕末の「安久津一山絵図」には、本殿・層塔・舞殿・鳥居・参道などが描かれ、当時の信仰心を垣間見ることが出来る。伊達の侵入から遡ること約七五〇年前の飛鳥時代、大和盆地を拠点とする勢力は近畿地方を中心に全国に拡大し、天皇を頂点とする中央集権国家の建設を進め、東北地方にも進出を企てた。日本海側の新潟・山形・秋田県の沿岸部を北上するルート、かたや東山道を北東に進み福島から多賀城に向かう行程である。そして、大和勢力の影響は内陸部でも確認されている。高島町の安久津古墳群から蕨手刀が、立林古墳からは和同開珎が出土し、当時の中央勢力との強い結びつきをうかがい知ることができる。また、高島町尻遺跡から瓦塔とよばれる陶製の層塔の一部が、高安窯跡では瓦が出土し周辺一帯には寺院の存在も予想される。ではなぜ高島町域が古代・中世における大規模な進出拠点になったのであろうか。

「屋代郷」は、承平七年（九三七）に成立した和名類聚抄にその名が見え、高島町域を含めた周辺地域が屋代郷に比定されている。もともと「ヤシロ」は社・屋代の字が当てられ、「神霊のまつられた施設で祭祀をおこなう場」とされる。そこで想像をたくましくすれば、町内に露呈する凝灰岩の巨岩・奇岩は神が降臨するための目印、すなわち依代と見ることが出来る。とすれば屋代川流域一帯は神の居所で神聖な場として、太古から観念視されてきたと理解されよう。伊達氏による八幡宮の保護や、大和勢力が国策とした仏教推進の痕跡などは、「ヤシロ」を背景に、人心を収攬する目的があったのかもしれない。

企画展記念講演会

「山形の縄文時代中期前半の文化動態」

令和2年11月15日(日)



今年度の企画展講演会は菅原哲文先生の「山形県の縄文時代中期以前半の文化動態」と題する演題で開催されました。

まず、中期前半は遺跡数の大幅な増加、各盆地に拠点的な大集落が形成されること。その拠点的集落には大型住居が建てられること。土器や石器を大量に廃棄した捨て場が形成され、数百箱から千箱を越える遺物が出土し、土偶や石棒を用いる祭祀が盛んとなることなど、この時代の概略からお話しが始まりました。

今回は縄文土器を中心に当該期の文化動態を検討するというものでした。

東北地方南部の中期前半の土器型式は大木7a・7b・8a式で今回の企画展の中心をなす水木田遺跡の千葉の土器では、大木7a式期は関東・中部に分布する五領ヶ台式の影響を受けた土器が見られ、大木7b式期は五領ヶ台式に加え北陸の新崎式、北東北の円筒上層b式も見られるということです。

庄内では北陸方面の影響が強く、特に鶴岡市の西向遺跡では東北南部の大木7a・b式に加え、一定程度の北東北の円筒上層a・c式土器もあるものの北陸の新保・新崎式の土器が全体の74%を占めているということでした。飛島の蔵山遺跡でも同じ傾向ということでは

す。大木8a式期になると南東北の大木8a式が主となり、北陸系の馬高式、円筒上層系とも出土割合は低くなるということでした。

新庄盆地の大木7b・8a式期の中川原C遺跡では7b式に一部円筒上層式土器と類似するものがあり、西ノ前遺跡には僅かではあるが、五領ヶ台式や新崎式の土器が伴うということでした。

米沢盆地の台ノ上遺跡の大木7a式では関東の五領ヶ台式、北陸の新保・新崎の影響を受けた土器の割合が新庄・山形盆地に比べて多く、7b式には東関東の阿玉台式の影響を受けるが、8a式期には馬高式土器は伴わないこと、長井市の宮遺跡では大木7b式に北陸系、阿玉台式が伴い、小国町谷地遺跡では7b式期は北陸系土器が全体の半数を占め、関東系土器も伴う

が、つぎの8a式期では北陸の馬高式は少量であるということでした。

山形盆地では中期初頭から前葉にかけては五領ヶ台式土器の影響が強く、北陸系は僅か、最近、円筒上層式土器も確認されたということでした。

また、中期に入ると脚がある立像土偶が出現し、7b式期には大型化が進み「西ノ前型式」が成立し、8a式期には西ノ前遺跡など山形・宮城の奥羽山脈を挟む地域で盛んに作られるが、米沢盆地

では福島県域の影響が強い亜種が主体であるということでした。

最後に①県内の中期初頭から前葉は北陸や関東の土器文化の影響が強く、地域によってその度合いが異なること。②大木8a式期に入ると他地域からの影響がなくなるわけではないが、大木式土器文化が強化され、逆に県外地域に影響を与えていくこと。③土偶は県北・県央を中心に「西ノ前型式」が作られ、県南は福島の影響を受けた亜種タイプが存在するというお話で講演を締めくくられました。

うきたむ学講座

今年度は感染症拡大防止の観点から中止させていただきます。ご理解の程よろしくお願いたします。



▲企画展記念講演会 菅原 哲文 氏

第二十二期

考古学セミナー

令和2年9月27日／10月11日／10月18日(日)

今期は、「水木田遺跡」と縄文時代中期前葉の山形」と題して全三回開講し、企画展をより深く理解する機会を設けました。また、例年通り三回全てに参加された方には修了書をお渡ししました。以下に内容をご紹介します。

「庄内地方の縄文時代中期前半について」

須賀井新人 氏

(公益財団法人

山形県埋蔵文化財センター)

須賀井氏からは、鶴岡市の西向遺跡、酒田市飛島の蔵山遺跡(当館企画展で土器を展示)、遊佐町の柴燈林遺跡等、庄内地方の、縄文時代中期前半の遺跡について紹介していただきました。

「重要文化財 水木田遺跡出土品について」

阿部明彦 氏

(山形考古学会副会長)

今回の企画展の協力者でもある阿部氏からは、メインの展示品である、水木田遺跡出土品の解説を中心に、国宝の土偶「縄文の女神」(舟形町西ノ前遺跡出土、山形県立博物館蔵)の説明等をしていただきました。

「村山地方の縄文時代中期前半について」

(当館館長) 渋谷孝雄

渋谷からは、上山市の牧野遺跡、思い川遺跡、村山市の落合遺跡、(いづれも資料を当館企画展にて展示)、山形市百々山遺跡等、村山地方の縄文時代中期の遺跡について詳しく紹介しました。

「最上地方の縄文時代中期前半について」

水戸部秀樹 氏

(公益財団法人

山形県埋蔵文化財センター)

水戸部氏からは、最上町の水木田遺跡、舟形町の西ノ前遺跡、新庄市の中川原C遺跡(資料を当館企画展にて展示)等、最上地方の縄文時代の遺跡についてお話していただきました。

「東置賜地方の縄文時代中期前半について」

菊地政信 氏

(日本考古学協会会員)

元米沢市の職員である菊地氏からは、米沢市の台ノ上遺跡(土器を当館常設展にて展示)を中心にお話していただきました。未公開資料の実物をお持ちいただき、当時どのように使用されたのかなど、参加者との討論形式

でお話をしていただきました。

「西置賜地方の縄文時代中期前半について」

岩崎義信 氏

(長井市教育委員会)

岩崎氏からは、長井市の宮遺跡(当館企画展にて資料を展示)、小国町、白鷹町の縄文時代中期の遺跡について解説していただきました。また、土器や耳飾りなどを、各遺跡で比較した資料などのお話もしていただきました。

当館ホームページにて、セミナーの当日資料・映像を公開しております。記念講演会につきましまして、三月刊行の『うきたむ考古』に講演抄を掲載いたします。併せてご覧下さい。

絶賛頒布中!

「水木田遺跡と

縄文時代中期

前半の山形」



今年度の第二十八回企画展「水木田遺跡と縄文時代中期前半の山形」の展示図録です。

保存修理が終了した重要文化財「山形県水木田遺跡出土品」を中心に県内の縄文時代中期の出土品を見ていきます。展示遺物を全点収録。

詳細は、当館までお問い合わせください。

目次

- 序章 水木田遺跡と縄文時代中期前半の山形
- 第1章 土器
- 第2章 土偶・土製品・石製品・石器

頒布価格 1,500円

火箱岩洞窟

高島町時沢 ●縄文時代草創期〜古墳時代

置賜史跡めぐり (50)

高島町時沢にある洞窟遺跡で、南東に開口する上下二つの洞窟よりなり、上部に南面する間口14m奥行3mを火箱岩上洞、下部の東面する間口4m奥行6m洞窟を火箱岩下洞と呼称します。上・下洞ともに凝灰岩が浸食、風化によって作り出されたものです。

本洞窟は、昭和三十五年(1960)に発見されたもので、その後、昭和三十六年から三十八年にかけて、前後三次にわたる発掘調査が実施されました。第一次調査は上洞及び下洞入口部、第二次調査は下洞の洞奥部、第三次調査は下洞内及び洞外岩陰部についてそれぞれ実施されています。

その結果、上洞は縄文時代前期から古墳時代まで、下洞



▲ 火箱岩洞窟 (下洞)

は縄文時代草創期から古墳時代まで利用された洞窟遺跡であることが確認されました。特に下洞は、上洞と比べ規模が大きく、上部を除けば堆積土が良好に遺存していたため、三次にわたる調査も主として下洞に集中して行われました。多くの出土遺物が得られました。中でも下洞IV層からVII層にかけて出土した隆起線文土器、爪型文土器、押

圧縄文土器などの土器群は、良好な状態で検出され、土器の変遷をよく示しています。これらの層位的事実は、縄文時代草創期の土器編年を秩序だてる重要な役割を果たしました。他にも石鏃・石錐・石槍・搔器等の石器が出土しています。付近に地獄岩洞穴、大師森山石窟等があります。昭和五八年四月二六日に国の史跡に指定されました。

我が館の展示品 (44)

黒曜石

旧石器時代後期
●小国町 湯の花遺跡

湯の花遺跡からは、北海道白滝産、青森県深浦町産、青森県出来島産、秋田県脇本産、長野県小深沢産、長野県星ヶ塔産と遠く離れた地域の黒曜石が見つかっています。

直線距離で700キロも離れた北海道からどのような経緯で湯の花遺跡に持ち込まれたのかはわかりません。いずれにしてもなんらかの方法で、遠くはなれた各地域との交流によってもたらされた物である事は間違いありません。

旧石器時代の人々の暮らしぶりを想像しながら、触ると手が切れる程の鋭さをもった各地の黒曜石を、ぜひ当館にてご覧になって下さい。

▼ 左 剥片 (北海道白滝産)・右 碎片 (長野県小深沢産)



▲ 左 石刃 (青森県深浦産)・右 搔器 (秋田県脇本産)